日韓における類義語の音訓反復表現について

――日日（ひニチ）、야밤（夜（ヤ））などを中心に

李　勇九

一　はじめに

日本語の漢（字）語の読み方は「日日：ひ（訓（義））＋ニチ（音）[1]」のように「訓」と「音」がある。韓国語も「夜」という形を야（ヤ（音））と밤（ぱむ（訓（義））で読んでいる。日本語、韓国語の漢（字）語の音訓を以下のように示す。

形	夜	日
音	（J）夜（ヤ）（K）야（ヤ）	（J）日（ニチ・ジツ）（K）일（イル）
訓（義）	（J）夜（よる）（K）밤（ぱむ）	（J）日（ひ・か）（K）날（なる）

辞典の見出し語で見える類義語の音訓又は訓音で表れている例の中で一字漢（字）語を中心として比べてみることにする。「びっくり仰天」の「びっくり」に「仰天」、「더이상（-以上）」の「더（と（訓）・（もっと（義））」に「以上」のような二字漢（字）語は対象外とする。

類義語は沖森編『語と語彙』（２０１２）の等価関係（母・おかあさん）、包摂関係（くるま・自動車）、共通関係（いえ・うち）、隣接関係（生徒・学生）のような関係の類義語を対象にする。日本語の音訓は『五十音引き漢和辞典』第２版を参考にする。韓国語は『東亜漢韓大辞典』と『現代實用玉篇』最新版を参考にする。

二　辞書に見える例

今回において例は以下の両国語辞典で選んで、参照した。

《日本語》

『明鏡国語辞典』、『小学館日本語新辞典』、『新明解国語辞典』

《韓国語》

『延世韓国語辞典』、『民衆エッセンス国語辞典』、『東亜새국語辞典』

上記の日韓両言語を対象にして、韓国語は『우리말[2]語源辞典』、『우리말의 통사 어찌씨 연구』、日本語は『大辞林』と『広辞苑』なども参考にして意味を見てみることにした。

二-一　副詞の例

二-一-一　「訓（義）＋音」の例（湯桶読みのような例）

《韓国語》

1. 난생（-生（なんセン））

난（なん）は「生まれる」の나다（なだ）の連体詞で、日本語の「訓」のような例で訓読みに当る。생（セン）は「生」の「音」である。即ち、난생は「訓」と「音」の類義語の反復表現で、日本語の湯桶読みのような例である。類義関係[3]の語が二回表れて「このように生まれて」という副詞に変わったとも見られる（意味変化）。

2. 애초（-初（えチョ））『民衆エッセンス国語辞典』「名詞だけど副詞的にも」

「애-당초（-當初）」は「애초에（-初（えチョへ））」を強調している語である。『우리말 語源辞典』で「애（え）」は中世語「아ᄉᆡ［初（ᄎᆞ）］」が変化した形であると言っている（아ᄉᆡ→아이→애）。『延世韓国語辞典』には「애（え）」は接頭語で一部の名詞に付いて「幼い」「初めての」などの意を表していると書いてある。초（チョ）は「初」の「音」である。類義語の反復表現の湯桶読みのような例で、接頭語がついている強調表現とも考えられる。

二-一-二　「音＋訓（義）」の例（重箱読みのような例）

《韓国語》

1. 별달리（別-（ピョルたるり））

별（ピョル）は「別」の「音」である。달리（たるり）は「他に、別に」の副詞である（『民衆エッセンス国語辞典』）。「音」と「訓」の重箱読みのような例であるが、별달리が見出し語として出していない辞典が多い。しかし、『우리말의 통사 어찌씨 연구』では「별다르다（特別だ）」に派生接辞「-이（い）」が着いた副詞として認めている。[4] 달리（たるり）だけでも意味は通じるのに接頭語のように별（別-（ピョル））をつけて強調しているとも考えられる（接頭語のように）。

2. 야밤（夜-（ヤばむ））에

야（ヤ）は「夜」の「音」である。밤（ばむ）は「夜」の「訓」である。重箱読みの類義語の反復表現であるが、『民衆エッセンス国語辞典』には名詞として出している。しかし、「真夜中に」のように助詞「～に」が付いた形の「야밤（夜-）에」のように時を表す副詞とも考えられる。밤（ばむ）の意味を強調するために接頭語のように야（夜-（ヤ））をつけて「深い真夜中に」と強調しているようにも見える。（接頭語のように）。

3. 연거푸（連-（ヨンこぷ））

연（ヨン）は「連」の「音」である。『우리말 語源辞典』に「連（연（ヨン））＋겊（こっ）＋우（う）」に分析して、「겊（こっ）」

は「ᄀᆞᆯᄃᆞ／ᄀᆞᆯᄃᆞ［竝・重疊］」の語根と同根語で「우（う）」は副詞の接辞であると述べている。거푸（こぷ）の「重ねて、繰り返して」の意である。類義語の反復表現で重箱読みのような例と見ても良いと思われる。거푸（こぷ）に接頭語のように연（連-（ヨン））をつけて「引き続き、続けさまに」のように強調している（接頭語のように）。

「ᄀᆞᆯᄋᆞ

4．연이어（連-（ヨンいお））

연（ヨン）は「連」の「音」である。이어（いお）は잇다（いった）「結ぶ、繋ぐ」の語尾다（た）が活用した形이어（いお）である。類義語の反復表現の重箱読みのような例とみて良いと思うのである。이어（いお）に接頭語のように연（連-（ヨン））をつけて強調し「次次と、連なって」の意になる（接頭語のように）。

5．직바로（直-（チッばろ）

직（チッ）は「直」の「音」である。『우리말 語源辞典』で副詞の「바로（≪바ᄅ）（ばろ）」は基本意味が「直（직（チッ））」で「まっすぐに、正しく、正直に、直に」であると書いてある。類義語の反復表現の湯桶読みのような例で接頭語のように직（直-（チッ）をつけて強調しているとも見える（接頭語のように）。

《日本語》

今回の調べでは見当たらなかった。

《韓国語》

「訓（義）＋音」2語「난생（-生（なんセン））、애초（-初（えチョ））」

・「한글（固有語）＋漢（字）語の音」の「訓（義）＋音」の湯桶読みのような例は2語が調べられた。動詞（나다（なだ（生まれる））の連体詞の난（なん）と接頭語の애（え）がついて強調しているとも見える。난（なん）、생（セン）、애（え）、초（チョ）の単独では意味が伝わりにくい。

・「付語（付け加える語）」と「本語（本になる語）」と分けるのは難しいが、漢（字）語の意味の可視的な効果から見ると、애초（-初（えチョ））と난생（-生（なんセン））の「音」の초（-初（チョ））と생（-生（セン））とが「本語」で、接頭語の애（え）と連体詞の난（なん）は固有語の「訓（義）」で「付語」であろうとも考えられる。

「音＋訓（義）」

・「漢（字）語の音＋한글（固有語）」の「音＋訓（義）」の重箱読みのような例は、별달리（別-（ピョルたるり））、야밤（夜-（ヤばむ））、연거푸（連-（ヨンこぷ））、연이어（連-（ヨンいお））、직바로（直-（チッばろ）の5語が調べられた。

・달리（別に）、밤（夜）、거푸（続けて）、이어（繋いて）、바로（直）の4語は「訓（義）」だけでも意味が伝わる。しかし、接頭語のような별（別）、야（夜）、연（連）、직（直）だけでは書き言葉ではない場合は意味が伝わりにくい。

・「달리（別に）、밤（夜）、거푸（続けて）、이어（繋いて）、바

로（直）」だけでも意味が伝わるので「本語」とみて、「별（別）、야（夜）、연（連）、직（直）」だけでは意味が伝わりにくいので「付語」とみることもできるのではないかと思う。「付語」は接頭語のようについて強調するために付け加えているとも考えられる。即ち、「音＋訓（義）」で「音」が「付語」、「訓（義）」は「本語」のようにも考えられる。

・「訓（義）＋音」では애초（-初（えチョ））の「訓（義）」の固有語の애（え）を接頭語に使い、「音＋訓（義）」では별달리（別-（ピョルたるり））の「音」の漢（字）語の별（別）を接頭語のように使って可視化の効果で意味を強調しているようにも見える。

《日本語》

「訓（義）＋音」「音＋訓（義）」で類義語の反復表現で副詞の例はなかった。

二-二　名詞の例

二-二-一　「訓（義）＋音」の例（湯桶読みのような例）

《韓国語》

1. 개천（-川（けチョン））

『우리말 語源辞典』に개（け）は15世紀の文献〈龍飛御天歌〉に見られて浦（포（ポ））：川又は小川に海の水が出入りする所）を意味すると述べている。천（チョン）は「川」の「音」である。類義語の反復表現であろう。개（け）に接尾語のように천（-川（チョン））をつけて意味を正確に伝えるためにこのような使われ方をしているとも考えられる（接尾語のように）。

2. 글자（-字（くるザ））

『우리말 語源辞典』に〈三国史記〉の「文峴一云斤尸［*kür.文］波兮」、〈鶏林類事〉の「讀書曰乞鋪（글보-（くるボ-））から「書（서（ソ））」を漢字音「乞（*글（くる））」で書いたと出している。자（ザ）は「字」の「音」である。類義語の反復表現であろう。包摂関係とも見える글（くる）に接尾語のように자（-字（ザ））をつけて「文字」であることを正確に表しているとも考えられる（接尾語のように）。

3. 낱개（-個（なっケ））

『우리말 語源辞典』に中世語「：낯（なっ）［粒-箇］、낱［（なっ）箇］」は、「낟（なっ）」と同根語と書いてある。개（ケ）は「個」の「音」である。낱개（-個（なっケ））も類義語の反復表現であろう。낱（なっ）だけでは意味が弱く、개（-個（ケ））を接尾語のようにつけて「一つずつばらにして」という意味を正確にしているとも見える（個→一つずつばらにして）。

4. 담벽（-壁（たむビョク））

『우리말 語源辞典』に담［墻・垣（tam）］は「둠［圓（원）］（tum）」の母音交代形であると出しながら、「담（たむ）」は家の周りに巡らしてある「壁」という意味であると書いてある。벽

（ビョク）は「壁」の「音」である。담벽（-壁（たむビョク））は塀や壁の面を表す語で類義語の反復表現で意味変化したようにも見える（壁→壁面）。

5．담장（-墻（たむジャン））

「담（たむ）」は「壁」という意味で、『우리말 語源辞典』に「담장（↑담+墻）」「개천（↑개+川）」「역전앞（↑驛前+앞（訓（前））」は同義語である固有語と漢字語が重複されている言葉であると書いてある。장（ジャン）は「墻」の「音」である。담（たむ）だけでも「塀、垣、囲い」という意味になるが、接尾語のように장（ジャン）をつけることで意味がより正確に伝わるのであろう（接尾語のように）。

6．엿당（-糖（よっタン））

『現代實用玉篇』に「糖」の意味を「엿（よっ）：飴・砂糖（あめ玉）」と出している。『民衆エッセンス国語辞典』では「麦芽で糖化させた、甘味があって粘り気がある食品」と出し、「飴」を指している。당（タン）は「糖」の「音」である。類義義の反復表現の엿당（-糖（よっタン））を『民衆エッセンス国語辞典』では「マルトース（maltose）の慣用名」と出している。即ち、類義義の反復表現で意味が特定のものをさす語になった例であろう（飴（糖）→マルトース（maltose））。

7．옻칠（-漆（おっチル））

『우리말 語源辞典』に칠（チル）について「漆の木を意味する漢字の漆（チル：옻（おっ）ウルシ・暗い）の音と意味が同じだ」とある。칠（チル）は「漆」の「音」である。類義語の反復表現で「漆の塗料、または、それを塗ること」と意味が変わったとも考えられる（漆→漆の塗料）。

8．저울추（-錘（ちょうるチュ））

『우리말 語源辞典』に「訓（義）」の저울（ちょうる）は物の重さをはかる器具・機械をひっくるめてさす言葉とし、12世紀の文献の〈鷄林類事〉に「秤曰雌孛［cə-pur］と称している」とある。『現代實用玉篇』に「音」の「錘추（チュ）」は「おもり」として量るものを指している。저울추（-錘（ちょうるチュ））も類義語の反復表現で「分銅、重り」を特定のものをさす語に意味変化したようにも見えるのであろう（秤（錘）→分銅、重り）。

《日本語》

1．日日（ひニチ）

「音」も「訓（義）」も一字漢（字）語だけを対象にして調べた今回では、「訓（義）」と「音」が同じ漢（字）語である例は「日日（ひニチ）」しかなかった。類義語の反復表現を使うことで、「日（ひ）」の「日・陽・日出から日没の間[5]」の意から「ひどり」「日数」をさす語になり、正確な情報を表す表現になったとも考えられるのであろう（日→ひどり・日数）。

2．名題（なダイ）

『五十音引き漢和辞典』第2版で、「訓（義）」の「名（な）」は

「なまえの意」と出ており、「音」の「題（ダイ）」は「書物などの名」としている。包摂関係とも見える例であろう。『明鏡国語辞典』では「江戸で、歌舞伎狂言や浄瑠璃の題名」と、「名題看板」「名題役者」の例を出している。『広辞苑』では「氏名や物名を表題に揚げること」と説明している。類義語の反復表現で特定のものをさす語に意味変化した例であろう（名（題）→「名題看板」のような使い方）。

3．場所（ばショ）

『五十音引き漢和辞典』第2版で、「訓（義）」の「場（ば）」は「物事が行われるところ」と出し、「音」の「所（ショ）」は「ところ。ありか」と出している。共通関係にも思われる例であろう。「場（ば）[6]」に接尾語のように「所（ショ）」をつけて強調しているようにも考えられる（接尾語のように）。

4．場席（ばセキ）

『小学館日本語新辞典』では、「場席（ばセキ）」をやや古風な言い方と言いながら「①場所。空間。②いるべき席。座席」とある。「訓（義）」は「場（ば）」である。「音」の「席（セキ）[7]」は漢（字）語であるが、完全に日本語として定着している語であろう。類義語の反復表現で強調しているのであろう。しかし、「席（セキ）」という語の勢力が拡大することにより「場席（ばセキ）」は使わなくなったとも考えられる。

《韓国語》「訓（義）＋音」の例は8語

・「개천（-川（けチョン））、낱개（-個（なっケ））、담장（-墻（たむジャン））、옻칠（-漆（おっチル））」の4語は、同義語の反復表現であろう。

・「글자（-字（くるザ））、담벽（-壁（たむビョク））、엿당（-糖（よっタン））、저울추（-錘（ちょうるチュ））」の4語は、同義語ではないが類義語に見える反復表現であろう。

・「담벽（-壁（たむビョク））・（壁→壁面）、엿당（-糖（よっタン））・（飴（糖）→マルトース（maltose））、옻칠（-漆（おっチル））・（漆→ 漆の塗料）、저울추（-錘（ちょうるチュ））・（秤（錘）→分銅））」の4語は、同義語の反復表現が1語（옻칠（-漆（おっチル））と類義語の反復表現が3語は、意味変化したようにも見える。同義語の反復表現は意味変化しにくく、類義語の反復表現は意味変化しやすいように見える。

・「개천（-川（けチョン））、낱개（-個（なっケ））、담장（-墻（たむジャン））、글자（-字（くるザ））」の4語は、類義語の反復表現が1語（글자（-字（くるザ））と同義語の反復表現は3語があるが、正確に表すために漢（字）語を接尾語のように使って可視化して強調しているようにも見える例であろう。類義語の反復表現は接尾語のようなものが付きにくく、同義語の反復表現は接尾語のようなものが付きやすいようにも見える。

・「付語」と「本語」と分けるのは難しいが、固有語の「訓（義）」に漢（字）語の「音」の意味を加えて、可視化の効果により意味が正確に伝わるのではないか。

《日本語》「訓（義）＋音」の例は4語

・「日日（ひニチ）」の1語は同義語の反復表現で、「名題（なダイ）、場所（ばショ）、場席（ばセキ）」の3語は同義語ではないが類義語の反復表現であろう。
・「日日（ひニチ）・（日→ひどり・日数）、名題（なダイ）・（名（題）→名題看板」のように意味変化した例は2語があった。
・正確に表すために漢（字）語を接尾語のように使った例は「場所（ばショ）」の1語がある。「場席（ばセキ）」のように古風な言い方の1例もある。

二・二・二　「音＋訓（義）」の例（重箱読みのような例）

《韓国語》

1．각뿔（角・（カッぷる））

각（カッ）は「角」の音である。『우리말 語源辞典』に〈三国史記〉の「舒發翰・舒弗邯・角干（뿔한（ぷらん））が出ている」と角（ぷる）はモンゴル語でeberだが新羅時代の「伊罰、伊伐、于伐」に音写して使って、朝鮮初期に「뿔［角（각）］」に表記した語だと説明している。なので、類義語の反復表現で意味が数学の「角錐」をさす語に意味が変わったとも考えられる（角→角錐）。

2．금값（金・（クムかぷ））

금（クム）は「金」の「音」である。『現代實用玉篇』には「お金、貨幣（금（クム））」と書いて例として「金銭」を出している。『우리말 語源辞典』に값（かぷ）は買ったり売ったりするために決めた金額、価値、数又は数量と言いながら古代日本語「kafi［代價（대가）］」は「값（かぷ）」に対応していると書いてあるので、類義語の反復表現で금값（金・（クムかぷ））は「最高の金額」という意味を正確に伝えるために接頭語のように금（金・（クム））をつけて強調しているとも考えられる（接頭語のように）。

3．납땜（鑞・（ナプてむ））

납（ナプ）は「鑞」の音である。『東亜漢韓大辞典』には「鉛と真鍮との合金」とある。また、『우리말 語源辞典』で「납（なぷ）［鉛（연（ヨン））］」は〈三国史記〉に「鉛城本乃勿忽」と出て、高句麗末には「［乃勿（나모리）（なもり）］」と、高麗の〈鄕藥救急方〉の「［那勿（나물（なむる））］」が後に「납（なぷ）」となり、日本語の「namaru（鉛）」と一致し、납땜（ナプてむ）などのように使われていると述べている。『朝鮮語辞典』では납땜（鑞・（ナプてむ））を「鑞付け、はんだづけ」とある。「납（ナプ）鑞」と「납（なぷ）鉛」とは、同音で混同され、接合・合金する時には使われていたのではないかとも思われる。「땜（てむ）」も땜질（はんだ付け、継ぎ当て、継ぎはぎ、一部だけ繕うこと）の縮約形で땜（てむ）である。「땜（てむ）」に납（鑞・（ナプ））を接尾語のようにつけた例であろう。類義語の反復表現で強調しているようにも見える例であろう（接頭語のように）。

4．누다락（樓・（ヌだらく））

누（ヌ）は「樓」の「音」である。『現代實用玉篇』には「たか

どの」と書き、例として「楼閣・楼門」を出している。『우리말 語源辞典』に다락（だらく）は「高くついているところという意味である」と書いて、また、누다락（楼 -（ヌだらく））を「누（ヌ）楼」と「楼閣・高殿の上の階」との合成語であると言っている。類義語の反復表現であるが、『民衆エッセンス国語辞典』では「楼閣・高殿の上の階」と言い、場所を指している言葉になっている。即ち、類義語の反復表現で意味の強調より特定の場所を指す語に意味変化したとも見える例であろう（楼→楼閣・高殿の上の階）。

5. 담요（毯 -（タムよ））

담（タム）は「毯」の音である。『東亜漢韓大辞典』には「毛で編んだ敷物敷」とある。요（よ）について『우리말 語源辞典』では「人が横になったり、座る時に敷く敷物」そして「漢字「褥（욕（ヨク））」から終声（パッチム）が脱落した言葉である」と書いてある。類義語の反復表現で接頭語のように담（毯 -（タム））をつけて強調しているとも考えられる（接頭語のように）。

6. 당집（堂 -（タンじぷ））

당（タン）は「堂」の「音」で、『東亜漢韓大辞典』には「いえ（家）」とある。집（じぷ）について『우리말 語源辞典』では人が住むために作った建物と述べ、語源的意味は作ったものであると述べた後、「짓다（ちった）［作（작）］」の語根「짓（ちっ）」と同じで「깃（きっ）／짓（ちっ）［羽］」と同根語である（깃（きっ）［巣（소）］→짓（ちっ）→집（ちぷ））。類義語の反復表現で意味が変わって「神仏を祭るお堂」と特定のものをさす語になったとも考えられる（家→神仏を祭るお堂）。

7. 분가루（粉 -（ブンがる））

「분（ブン）は「粉」の「音」で、『現代實用玉篇』には「こな」と書いて例として「粉末、粉食など」を出している。『우리말 語源辞典』では「가루（がる）」について「가루［粉（분）］の語源的な意味は「擦って細かく砕いたものである」と書いてある。「분가루（粉 -（ブンがる））」は『民衆エッセンス国語辞典』では「1. 化粧品の粉の粉末。2. 粉のように白い粉末」と出しているように、類義語の反復表現で特定のものをさす語になった例であろう（粉→化粧品の粉の粉末）。

8. 삼세판（三 -（サムせぱん））[8]

삼（サム）は「三」の「音」である。셋（せっ）について『우리말 語源辞典』では〈鶏林類事〉に「三曰酒斯乃切［sai］」、〈朝鮮館驛語〉には「三 色一［sei］」などの例を出している。삼세（三 -（サムせ））で類義語の反復表現であろう。판（ぱん）について『우리말 語源辞典』で「ことが行われている席か場面又は樂調を表す」とある。삼세판（三 -（サムせぱん））は「多からず少なからず必ず三回」という意で삼（サム）を接頭語のようにつけて「三回」を強調する表現であろう（接頭語のように）。

9. 옥구슬（玉（-オッくする））

옥（オッ）は「玉」の「音」である。『우리말 語源辞典』では

〈三国史記〉で구슬［玉（옥）］を「古斯／兵斯［*고사（こさ）／구사（くさ）］」、〈鶏林類事〉に「珠曰區戌（주왈구술（チュワルくする））」と書いてあると述べ、今日の「구슬（くする）」と一致していると述べている。また、日本語の「kusirö［釧・玉］」は韓国語の「구슬［株］（くする）」の借用語の蓋然性が高いと述べている。「本語」の「구슬［株］（くする）」に接頭語のように「付語」の「옥（オッ）」を入れてもっと価値のある「구슬［株］（くする）」を表すために類義語の反復表現を使って強調しているとも考えられる（接頭語のように）。

10. 장마당（場・・（チャンまだん））

장（チャン）は「場」の「音」である。마당（まだん）について『우리말 語源辞典』では何かが行われている席又は場面と述べながら、中世語形は「맏（まっ）」であり、16世紀頃の〈訓蒙字會〉には「맏［場・圃］（まっ）」として出ていると述べている。しかし、장마당（場・・（チャンまだん））を『民衆エッセンス国語辞典』では「市が立つところ、市場」と書いてある。類義語の反復表現で特定の場所を指す語に意味が変わった例であろう（場→市が立つところ）。

11. 장터（場・（チャンと））

장（チャン）は「場」の「音」である。『우리말 語源辞典』で「터（と）」は「ㅍ」のように新羅・高句麗の「達」が変化した言葉で「達」は「양달（陽達）、응달（陰達）」などのように「땅［地］（たん）」を表している。また、「땅［地］（たん）」と「터［垈］（と）」は同根語であると述べている。そして「터（と）」は「所（場所）」又は「席」の意味で「장터（場・（チャンと））」などのように使われていると述べている。「장터（場・（チャンと））」も「장마당（場・・（チャンまだん））」と同じ意味で「市が立つところ」である。類義語の反復表現で特定の場所をさす語に意味が変わった例であろう（場→市が立つところ）。

12. 장판（場・（チャンぱん））

장（チャン）は「場」の「音」である。판（ぱん）は『우리말 語源辞典』に「ことが行われている席か場面又は樂調を表す」とある。類義語の反復表現で장마당（場・・（チャンまだん））と장터（場・（チャンと））と同じ意味の「市が立つところ」である。また比喩的に「人がたくさん集まってごった返しているところ」という意味にもなる。類義語の反復表現で意味が変わった例であろう（場→人がたくさん集まってごった返しているところ）。

13. 족발（足・（チョッぱる））

족（チョク）は「足」の「音」である。『우리말 語源辞典』には〈鶏林類事〉の「足曰撥（족왈발）（チョクわるぱる）」の「발［足］（ぱる）」は中世語の「（발（ぱる）」を経って現代語と一致していると述べている。しかし、類義語の反復表現で意味が「豚を殺して脚をいくつかの部分に分けて調理した豚足」の意味になる。特定の料理を指す語に意味変化した例であろう（足→豚足の料理）。

14. 철쇠（鐵 - （チョルせ））

철（チョル）は「鐵」「音」である。『우리말 語源辞典』では12世紀の文献の〈鷄林類事〉に「鐵曰歲［soi］」と表記したと言い、現代語の「쇠（せ）」は「소이（そい）」が縮んだ形であると述べている。類義語の反復表現で意味が変わって「強い金属」と「強い存在」などの意味であろう。「쇠（せ）」だけでも「強い」のに接頭語のように漢（字）語の「철鐵（チョル）」が加わってもっと強調しているようにも見える（接頭語のように）。

《日本語》

「音＋訓（義）」の同じ漢（字）語が「日日（ひニチ）」のように二回現れる例は見当たらなかった。

1. 店屋（テンや）

『明鏡国語辞典』、『小学館日本語新辞典』、『新明解国語辞典』の3つの辞典にはないが、『広辞苑』には見出し語がある。『五十音引き漢和辞典』第2版で、「音」の「店（テン）」は「みせ。たな。商家」と出している。「訓（義）」の「屋（や）」を『明鏡国語辞典』では「肉屋、植木屋」のように名詞につく接尾語とし「その商売を営む人や家の意を表す」と出している。『広辞苑』では「店屋（テンや）」を「特に、飲食物を売る店」と出している。類義語の反復表現で「飲食物を売る店」を指しているが「音」の「テン」に接尾語のように「屋（や）」をつけて特定のものをさす語になった例であろう（接尾語のように）。

2. 本元（ホンもと）

『五十音引き漢和辞典』第2版で、「音」の「本（ホン）」は「①もと。物事の基礎。大もと。もとから」「②もととなる。主要・中心となる」と出している。「訓（義）」の「元（もと）」を『新明解国語辞典』では「㊀それが成り立つ基礎・根源となるもの」と出している。「本元（ホンもと）」は類義語の反復表現で「いちばんのもと」という意で「本家本元」のように使われ、「本家」を強調していう語になっているかのようにも見える例であろう（もと→本家本元）。

3. 紋柄（モンがら）

『新明解国語辞典』は「織物に織り出された模様の様子。模様の柄」と出している。『五十音引き漢和辞典』第2版で、「音」の「紋（モン）」は「あや。模様」と出している。「柄（がら）」を『明鏡国語辞典』では「布・織物などの模様」と言いながら、名詞につく接尾語で「土地柄」、「商売柄朝が早い」、「時節柄ご自愛ください」の例を出している。「紋柄（モンがら）」でも「柄（がら）」が接尾語のような役割を果たしているかのように見えるのであろう（接尾語のような役割）。

《韓国語》「音＋訓（義）」の例は14語

・「각뿔（角 - （カッぷる））、납땜（鑞 - （ナプてむ））、누다락（樓 - （ヌだらく））、담요（毯 - （タムよ））、당집（堂 - （タンじぷ））、분가루（粉 - （ブンがる））、삼세판（三 - （サムせぱん））、옥구슬（玉 - （オッくする））、족발（足 - （チョッぱる）、

철쇠（鐵・（チョルせ））」の10語は同義語と思われる語の反復表現であろう。

・「금값（金・（クムかぷ））、장마당（場・・（チャンまだん））、장터（場・（チャンと））、장판（場・（チャンぱん））」の4語は類義語とも見える語の反復表現であろう。

・「각뿔（角・（カッぷる））・（角→角錐）、누다락（樓・（ヌだらく））・（樓→楼閣・高殿の上の階）、당집（堂・（タンじぷ））・（家→神仏を祭るお堂）、분가루（粉・（ブンがる））・（粉→化粧品の粉の粉末）、족발（足・（チョッぱる））・（足→豚足の料理）、장마당（場・・（チャンまだん））・（場→市が立つところ）、장터（場・（チャンと））・（場→市が立つところ）、장판（場・（チャンぱん））・（場→人がたくさん集まってごった返しているところ）」の8語は意味変化した語であろう。同義語の反復表現が5例で意味変化しやすく、類義語の反復表現は3語で意味変化しにくいようにも見える。

・韓国語は「납땜（鑞・（ナプてむ））、담요（毯・（タムよ））、삼세판（三・（サムせぱん））、옥구슬（玉・（オッくする））、철쇠（鐵・（チョルせ））、금값（金・（クムかぷ））」の6語は正確に伝えるために漢（字）語を接頭語のように使った例であろう。同義語が5語で接頭語のようなものが付きやすく、類義語の反復表現が接頭語のようなものが付きにくいようにも見える。

《日本語》「音＋訓（義）」の例は3語

・「店屋（テンや）、本元（ホンもと）、本元（ホンもと）」の3語は同義語ではないが類義語とも見える語の反復表現であろう。同義語に見える語の反復表現の例はなかった。

・「本元（ホンもと）・（もと→本家本元）」のように意味変化した例が1語であろう。

・日本語の2語は「店屋（テンや）、紋柄（モンがら）」は「訓（義）」の「屋（や）、柄（がら）」が接尾語のようについた例であろう。

三　おわりに

《韓国語》

나찬연（2004）は「담장（-墻（たむジャン））、분가루（粉・（ブンがる））、족발（足・（チョッぱる）、야밤（夜・（ヤばむ））、로프（roup）줄（じゅる（紐））など」の例を出して「漢字語か西洋の外来語かを聞く人が解らなかったり、伝達途中で障害が発生し、意思疎通が円滑に進まないことを防ぐために適定量の情報よりもっと多い情報を与えるから起こる現象である」と述べている。即ち、漢（字）語の情報の「音」に「訓（義）」の情報を入れてより意味を正確に表すことであろう。しかし、「별달리（別・（ピョルたるり））、담장（-墻（たむジャン））、옥구슬（玉・（オッくする））」の「달리（たるり）、담（たむ）、구슬（くする）」の漢字で書かなくても固有語だけも「訓（義）」の「べつ（別）に、へい（塀）、たま（珠）」という意味が通じる。「訓（義）」の固有語の「本語」だけでも良いのに接頭語・接尾辞のように漢（字）語の「付語」の「音」をつけてより強調しているようにも見える。即ち、「音」の情報を入れて可視化してい

るようにも考えられる。

《日本語》

日本語は「訓（義）」にも当て字をして可視化して情報を伝えるので、一字の漢（字）語の場合、わざわざ同じ漢（字）語を２回繰り返し「訓（義）＋音」・「音＋訓（義）」で表す必要性がそれほど高くないため例が少ないことも考えられる。韓国語の類義語・同義語の反復表現で漢（字）語の「音」を接頭語（又は接尾語）のように可視化しているが、日本語は「紋柄（モンがら）」の「訓（義）」の「柄（がら）」のように漢（字）語を当て字に使って可視化して接尾語に使われる例もある。

《比較》

日本語は「紋柄（モンがら）」のように「付語」の接尾語に使う例があり、韓国語も「애ㅊ（-初（ㅊチョ））」の「訓（義）」の「애（ㅊ）」を接頭語に使う例がある。しかし、韓国語は固有語の「애（ㅊ）」を「付語」し、「音」の「ㅊ（-初（チョ））」を「本語」にした例があるが、「訓（義）」を「本語」にし、漢（字）語を「付語」にして接頭語（接尾語）のように使う例が多い。日本語は当て字の影響で可視化しているためなのか「本語」と「付語」と分けるのは難しいのではないか。当て字をしないで固有語をそのまま使う韓国語は、同義語・類義語の反復表現では固有語の「訓（義）」を「本語」にして、一文字の漢（字）語を可視化して強調するために「付語」に使っているとも考えられる。

注

（1）「音」は括弧の中にカタカナで書く、「訓（義）」はひらがなで書くことにする。

（2）우리말（ウリマル）は韓国語の言葉という意味である。

（3）等価関係、包摂関係、共通関係、隣接関係の細かい分類はしないで類義語とする。

（4）『우리말의 통사 어찌씨 연구』「'별달리,〈다른 것과 특별히 다르게〉의 뜻을지닌어찌씨로…」「訳（著者）…「별달리」は〈他のものと特別に異なって〉の意味を持っている副詞…」

（5）『日本語源広辞苑』「ひ【日・陽】…日出から日没までの間を意味します」

（6）『日本語源広辞苑』「ば【場】語源は、「マ（間・土間・庭）の音韻変化のバ」です。転じて、広く、場所の意になった言葉です。」

（7）『明鏡国語辞典』「せき【席】①すわる場所。すわるように決められた場所。…②会・催しなどが行われる場、場所。…」

（8）（삼세번（三-番（サムセボン））もあるが、漢（字）語が二つあるのは対象外とする。

《参考文献》

손남익（１９９５）『韓国副詞研究』박이정出版社

나찬연（２００４）『우리말 잉여표현 연구』図書出版月印

全鐵（２００４）「韓日両言語の「一字漢語」研究」慶尙大學校大學院博士論文

野間秀樹編著（２００７）『韓国語教育論講講座』第1巻　伊藤英人「漢字音教育法」くろしお出版

沖森卓也編著（２０１２）『語と語彙』朝倉書店

沖森卓也・曺喜澈編著（２０１４）『韓国語と日本語』朝倉書店
백문식（２０１４）『우리말 語源辞典』図書出版　박이정
한길（２０１６）『우리말의 통사 어찌씨 연구』図書出版　역락

《辞典》

李家源　權五惇　任昌淳　監修（１９８２）『東亞漢韓大辭典』東亞出版社
延世大学校　言語情報開発研究院編（１９９８）『延世韓国語辞典』斗山東亞
尹正燮（２０００）『現代實用玉篇』図書出版　윤미디어
이희승　監修（２００１）『民衆エッセンス国語辞典』第五版　民衆書林
北原保雄編（２００２）『新明解国語辞典』大修館書店
山田忠雄主幹（２００５）『新明解国語』第六版　三省堂
松井栄一編（２００５）『小学館日本語新辞典』小学館
松村明編（２００６）『大辞林』第三版　三省堂
延世大学校言語情報開発研究院編（２００６）『延世韓国語辞典』斗山東亞
이기문　監修（２０１２）『東亜새国語辞典』斗山東亞編
増井金典著（２０１２）『日本語源広辞苑［増補版］』ミネルヴァ書房
沖森卓也編（２０１４）『五十音引き漢和辞典』第二版　三省堂
新村出編（２０１８）『広辞苑』第七版　岩波書店
共同編集小学館・韓国金星出版社（１９９３）『朝鮮語辞典』小学館

（い　よんぐ　都留文科大学講師）